OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	黄震の経学 ： 「読礼記」における注釈の態度
Author(s)	神林, 裕子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1993, 27, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6788
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

黄震の経学

――「読礼記」における注釈の態度――

神林裕子

一　黄震の朱子に対する評価

黄震[1]は、朱子および呂祖謙に師事した輔広から三伝の弟子である。従来の研究で黄震は、理気説あるいは人性論といった、哲学的な側面から、朱子の後継者あるいは修正者として位置付けられてきた。しかし、それ以外に、黄震の注釈家としての態度にもまた、朱子の後継者としての意識が窺われる。中でも朱子の『四書集注』に対して、黄震は特に高い評価を与えており、『黄氏日抄』（以下、『日抄』と略記する）巻二に、次のようにある。

> 本朝　理学を講明し、詁訓を脱去して自り、其の説　遠く漢唐を過ぐと雖も、善く学ばざる者、之を求むること過だ高く、従りて新説を増衍す。特り意味　反って浅きのみならずして、之を遠きに失する者或いは有り。晦庵『集注』を為るに至りて、復た詁訓を祖とす。先ず字義を明らかにし、本文をして坦然として知り易か

ら使め、而る後に先儒の議論の精なるものの一、二語を択び之に附し、以て其の指要を発く。諸説　同じからざれば、後学者をして疑誤せしむるを恐れて、又『或問』を為りて以て之を辨ず。

黄震は訓詁を疎かにして空理空論を振りかざす当時の学風を退け、着実な訓詁の復興者として朱子を再評価している。しかし黄震は、いたずらに複雑な注解を与えることは善しとしなかった。

近世　晦庵が字義を闢かんとする者　固より此に事うるのみを屑しとせず。其の尊びて之を慕う者　又争いて以て名家（朱子）に注解せんと欲す。浩浩たる長篇、多く自ら之が辞を為し、経に於けるや漸く相遠し。甚きは、或いは鑿ちて新奇を為し、反って勝ることを求めんと欲す。豈に理として固より無窮ならんや（『日抄』巻二）。

これは朱子学亜流への批判と言える。では次に具体的に黄震がどのように朱子の注釈態度を重んじていたかを、黄震自身の注解の中に見てみたい。そこで本稿は、『日抄』の中の「読礼記」という一篇に注目して考察を加えることとする。

二　「読礼記」に対する評価

『日抄』中の経書に関する記述、全三十巻の内、「読礼記」の十六巻は、その過半数を占めており、これに次いで多いのが「読春秋」の七巻である。他の篇がそれぞれの経書の断片的な注解であるのに対して、この「読礼記」および「読春秋」は、全経文に注解を加えている。このことから、黄震が経書の中でも、特に『礼記』と『春秋』と

の注解に力を入れていたことが分かる。この点について『宋元学案補編』巻八十六に次のようにある。

> 姚世昌（福）曰く、五経〔について言えば〕、朱子　『春秋』『礼記』において書を成す無し。東発　二経を取りて之が集解を為る。其の義　甚だ精し。蓋し朱子の未だ備わらざるものを補わんと志す有るも、且く顕らかにするを欲せず。故に『日抄』中に附す。其の後、程端学に『春秋本義』有り、陳澔に『礼記集説』有れど、皆　之に過ぐること能わずと。

なるほど朱子は『礼記』を『儀礼』の注とみなし、両者を『儀礼経伝通解』という一冊にまとめているため、朱子には独立した『礼記』の注釈書がない。そこで黄震は、その点を補おうとして「読礼記」を選述したと言える。

さて姚福は、「皆　之（「読礼記」「読春秋」）に過ぐること能わず」と、黄震の「読礼記」および「読春秋」をかなり高く評価している。また『続文献通考』や『三才図会』を著した明の王圻にも、姚福とほぼ同じ発言があると、林政華『黄震及其諸子学』（民国六五年、嘉新水泥公司文化基金会）は指摘している。この他、黄震の「読礼記」「読春秋」に注目した人物として清の張宗泰が挙げられる。彼は『魯巖初学集』（大華文史叢書第一集、闕名輯、民国五七年、台北大華印書館）の中で、かなりの紙幅を割いて『日抄』、とりわけ「読礼記」と「読春秋」とについて、その誤りを指摘している。ところが、いずれの指摘も、黄震の誤りを批判するものではなく、常に「是れも亦偶然の筆の誤なり」あるいは「此れも亦偶たま検に及ばざるの失なり」等の語が添えられており、むしろ黄震に対してかなり好意的に弁護している。また日本においても、内閣文庫所蔵の林家本『日抄』を見ると、その「読礼記」には盛んに読まれた跡がある。これは『日抄』巻十五の巻末に「甲午乙未両年の際　礼記を講ぜし時一覧し了んぬ　春

斎」、巻二十四の巻末に「万治二年四月十六日　一覧し了んぬ　向陽子」、巻二十五の巻末に「万治己亥七月八日　此の冊を一覧し了んぬ　向陽子」とあることから、雅号を向陽軒と称していた林鵞峰（通称は春斎）の朱筆であると考えられる。また静嘉堂文庫所蔵の抄本『日抄』では、「読春秋」に集中的に朱筆が加えられている。やはりこの両篇は『日抄』の中でも特に注目されていたのであろう。「読礼記」については、清の杭世駿の『続礼記集説』の序文に次のような評価も見られる。

> 衛氏〔湜〕の後に在る者、宋儒〔の場合〕は、黄東発（震）に如くは無きも、〔黄震の〕『〔黄氏〕日抄』中、諸経は皆　先儒に本づき、東発に特解無し。元儒〔の場合〕は、呉草廬（澄）に如くは莫きも、〔呉澄の〕『〔礼記〕纂言』〔は〕篇次を変乱して名目を区分すれば、乃ち経学の駢枝にして、鄭〔玄〕・孔〔穎達〕の正嫡に非ず。

杭世駿は武英殿版十三経二十四史を校勘した人物で、『続礼記集説』はその名の通り、宋の衛湜の『礼記集説』の続編である。衛湜『礼記集説』一百六十巻は、鄭玄以下百四十四家の注解および『礼記』に関するあらゆる言を集めた膨大な書物で、中には既に散佚していて衛湜『礼記集説』によってしか見られない説も多い。『四庫全書総目提要』（以下、『四庫提要』と略記する）も衛湜『礼記集説』を「礼家の淵海と云う可し」と称している。この衛湜に続く人物として、黄震と呉澄とを挙げているのであるから、杭世駿も「読礼記」に一応の評価を与えていると言える。

三　黄震の「読礼記」選述の意図

黄震の時代、『礼記』全篇にわたる注釈書は少なく、しかもその入手が困難であったため、後学者の学習の便宜を図るべく「読礼記」は選述された。そして「読礼記」は何よりもまず、簡明な『礼記』の注解を目指していた。

> 呉郡の（衛湜）（ママ）『礼記』（ママ）(2)の解を集め、鄭康成自りこのかた、一百四十六家（一百四十四家の誤り）を得（すなわち『礼記集説』）。惟だ方氏〔慤〕・馬氏〔晞孟〕・陸氏〔佃〕は全書有れど、其の餘は僅かに篇章を解するのみ。凡そ講義・論説の嘗て之に及ぶものは、皆　之を取りて以て其の数に足す。其の書　浩瀚、惟だ厳陵郡に官本有るのみ。岳公珂　集有るも、亦然り。皆　未だ遍観するに易からず。天台の（賈蒙）（ママ）之を継ぎ、始めて二十六家を選取し、衛・岳に視べて要と為す。而れども其の采取　亦互いに同じからざる有り。其の書　又惟だ儀真郡学に録本有るのみにして、世　罕に其の伝を得るのみ（『日抄』巻十四）。

黄震は、注釈書の中でも衛湜『礼記集説』をその最大のものと認め、これを本（もと）に「読礼記」を選述したと言われるが、一方で、「未だ遍観するに易からず」と述べている。『四庫提要』巻二十一の陳澔『礼記集説』に対する解題にも、「宋代は衛湜より善きは莫し、而れども巻帙　繁富なるも亦澔注の簡便なるに似ず」とある。つまり、その内容があまりに該博であると、特に初学者などにとっては却て極めて不便なものとなることがある。衛湜の注が、陳澔の注ほどには普及しなかった原因はここに在る。黄震は、陳澔よりも早い時期に、その「簡便」であることの必要性を感じ、それを「読礼記」という形で実現したと言える。そして、これは、衛湜『礼記集説』に限らず、当

時の繁雑な注解全般への反省とも言える。

賈蒙の注は、衛湜の注ほど膨大なものではなかったようだが、黄震は「其の采取　亦互いに同じからざる有り」と、賈蒙が採用した諸説は互いに食い違っていることを指摘している。これに対して「読礼記」は、賈蒙のように、ただ単に諸説を列挙するものではない。諸説を引く際には、必ずそれらを折衷し、初学者にも分かりやすい、矛盾を含まない統一的見解を与えようとしている。また「読礼記」は、その注解の形式においても、常に読者の立場を考慮に入れている。

今　因りて各家の集むる所を并合し、之を類抄す。昔　呂氏〔祖謙〕が『〔呂氏家塾〕読詩記』は、簡要なれど、文　姓氏の隔つ所と為る（後述）。高氏〔閌〕が『春秋集註』は、文　一家を成せど、元（原）注の姓氏〔の〕誰と為すかを知らず。〔そこで私は注解をするに当たって〕其の法を僭窃参用し、諸家の注文をして一為ら使めて、各おの姓氏を下方に出だし、間ま亦節録し或いは己が意を附す。然して〔その意図は〕所謂十一を千百に存するものにして、老眼の観省するに便なるに過ぎず。後生志学の士、自ら当に之を各家の全書に求むべしとしか云う（『日抄』巻十四）。

『呂氏家塾読詩記』は、諸説を列挙しているにもかかわらず、その前後の説が互いに食い違うことなく一貫した解釈になっている。ただ注釈者が替わるたびに「某氏曰く」「某氏曰く」とその姓氏を挙げるので、注文（ちゅうぶん）が途中でとぎれてしまう。一方、『春秋集註』は、私見に基づいて諸説を一つに融合しているため、その注解に拠って、容易に経文の意味が取れる。しかしもとの注釈者の姓氏を記していないので、一体誰の説を採用しているのか、またど

こまでが高閌の説なのか分からない。

両書はともに、先儒の注解をまとめるという点では、「読礼記」と同じ方針で選述されている。しかし、その形式においては、修正を加えるべきであると黄震は説いているのである。そこで黄震は両書の長所を取って、諸説を引用した場合は、必ず注文を途中で妨げないよう、最後に「鄭氏・孔氏の説を集む」あるいは「方氏及び呂氏」等と、割注で記している。また黄震自身の見解を述べる場合には、やはり注文の最後に割注で「補」とつけ加えている。

「読礼記」第十五巻の「大学」には、こうした黄震の読者に対する配慮が顕著に現れている。朱子以降、『礼記』の注釈書は、「大学」と「中庸」とに関しては、新たに注解を加えず、朱子の『章句』にそのまま拠るのが一般的である。そして、例えば陳澔『礼記集説』は、「大学・中庸」には、その経文および注を一切記さず、ただ「朱子章句」の四文字を記して、読者に『章句』を参照すべきことを促すだけである。ところが黄震「読礼記」の「大学・中庸」には、朱子の『章句』が全てそのまま収録されている。また黄震はただ『章句』を写すだけでなく、注解が不十分と思われる所は随時『或問』を引いて補っている。特に「大学」については、その冒頭に、『礼記』の「大学」原本それ自身をも載せている。そして最も独創的な点は、その巻末に、朱子の立場に拠って、「一経十伝」の形で「大学」の正文のみを再び記している点である。その説明として黄震は次のように述べる。

> 今　愚　抄する所は、故に全て『章句』を以てす。『或問』に至りては、則ち其の説を斟酌して、間ま之を附すのみ。然れども詳らかに説くは、将に以て反って約ならんとすればなり。『或問』由りして之れを『章句』に反し、『章句』由りして之れを正文に反す。此れ晦庵が本心なり。晦庵　嘗て学者をして且く去(ゆ)きて『大学』

正文のみを熟読せ令む。又た言う、『大学』は最も是の両章（『大学章句』伝之第七「釈正心修身」章・第八「釈修身斉家」章）の相い接する処　好看よと（『朱子語類』巻十六）。凡そ今　抄する所の『章句』、一経十伝に分かれ、逐句逐節の下、各おの注釈有りと雖も、惟だ初め読む時のみ、各おの其の下に於いて之を詳にす。既已に熟読の後は、合に正文を浄写すべし。惟だ両章の相い接する処において之を分かつは、玩味するに便なるを以てなり。凡そ皆　全て晦庵先生の説を祖とす（『日抄』巻二十八）。

「詳らかに説くは、将に以て反って約ならんとすればなり」とは、『孟子』離婁篇下の言葉である。『朱子語類』巻十一も、この『孟子』の言を引いて、「約」あるいは「博」の一方のみをひたすら求める学問態度を批判し、特に「近日の学者　多く約に従うを喜ぶ」と述べている。しかし黄震は、ここでは逆に「博」に走りがちな当時の学風を批判して、繁雑なものから簡潔なものへの転換を主張している。換言すれば、黄震は『礼記』に新しい解釈を与えるのではなく、「約」、すなわち先儒の説を要約することに主眼を置いて、「読礼記」を選述したのである。したがって前章で杭世駿は「読礼記」の特徴として「特解無し」と、「特解」が無いことを、あたかも「読礼記」の欠点のように述べているが、黄震は、むしろ努めて「特解」が無いようにしたと言えるかもしれない。

四　「読礼記」における注解の態度

黄震は朱子の注釈の態度を以下のように称している。

謂えらく晦庵　古今の注解を読み尽くし、音自よりして訓〔の理解〕あり、訓自りして義〔の理解〕あり、

〔そのようにして〕一字自りして一句、一句自りして一章〔の理解を得る〕ありて、以て言外の意に至る。〔朱子の解釈は〕透徹して礙(さまたげ)無く、瑩然として心に在ること琉璃の如く然り。方に敢えて筆を下すや、一字未だ透らざれば即ち未詳と云う（『日抄』巻二）。

黄震「読礼記」の注釈の態度は、まさに朱子のそれに倣っていると言える。黄震は、まず『釈文』に拠って音を記し、次に語釈を記し、さらに古今の注解を折衷して一句ごとの意味を記している。例えば「曲礼篇」の冒頭の「曲礼に曰く、敬せざる毋かれ、儼として思うが若くし、辞を安定す。民を安んずるかな」に対して次のように注解を加える。

（曲礼）とは礼の細、所謂曲礼三千なるものなり。（毋）は禁止の辞。主一、之を（敬）と謂う。（儼）とは矜荘の貌、人の坐して思うに、貌　必ず儼然たり。（安定）とは審なり。（哉）とは歎美の辞なり。〇「毋不敬」とは其の心を正すなり。「儼若思」とは其の貌を正すなり。「安定辞」とは其の言を正すなり。「安民哉」とは己を正して物正しき者なり。「毋不敬」とは主宰の処を総言するなり。「儼若思」とは敬の貌、「安定辞」とは敬の言、「安民哉」とは敬の効なり。右は呂氏及び晦庵の説に本づく。

＊（　）、〇、――は、原文のママ。また「右は……」以下は割注。

こうして黄震は朱子の注解の態度を見倣っているが、内容的には必ずしも朱子の説に従っていない。この点を黄百家も『宋元学案』巻八十六に「『日抄』の作、〔黄震は〕諸儒を折衷す。即ち考亭（朱子）におけるも亦苟同するを肯んぜず。其の自ら得る所の者　深ければなり」と述べている。「読礼記」中、「大学・中庸」以外では、むしろ

鄭玄や孔穎達の説を採っていることが多く、次に多いのが、方慤・馬晞孟・陸佃といった北宋の『礼記』の注釈家の注である。そして「読礼記」は、古い注解と新しい注解とを半々に採用し、それらを別けることなく折衷することも度々ある。なお直接は師事していないが、黄震の師に当たる輔広にも『礼記解』がある。この書については『経義考』も「未見」としており、その具体的な内容は分からないが、衛湜『礼記集説』に次のような解説がある。

〔輔広は〕註疏を方氏〔慤〕・馬氏〔晞孟〕・陸氏〔佃〕・胡氏〔銓〕の諸説に取り、〔輔広の師である〕呂氏〔祖謙〕が『〔呂氏家塾〕読詩記』に倣いて編集す。間ま己が説有り。

輔広は、黄震が批判した『呂氏家塾読詩記』の体裁に倣ってはいるが、黄震同様、方慤・馬晞孟・陸佃の三者の注解を中心に採用している。この点からみて、あるいは黄震の「読礼記」は、輔広の『礼記解』を補正しようとしたものであると言えるかもしれない。なお、この三者について、『宋元学案』は、陸佃は王安石の門人、方慤・馬晞孟は新学者[3]として、巻九十八の「荊公新学略」に収めている。黄震はしばしば王安石を批判しているが、決して全面的には否定していた訳ではない。方慤については、「荊公新学略」が引く朱子の言にも「方氏が『礼記解』儘く説き得て好き処有り、新学なるを以て之を黜く可からず」とある。このような黄震の柔軟な学問態度を『四庫提要』巻十八は次のように称している。

震は則ち自ら朱氏の学を為せど、相附和せず。是の編、読む所の諸書・随筆・箚記を以いて、断ずるに己が意を以てす。……その他　経義を解説するには、或いは諸家を引きて以て朱子を翼け、或いは朱子を舎てて諸家を取るも、亦門戸の見を堅持せず。蓋し震の朱を学ぶや、一に朱の程を学ぶが如し。反復発明し、務めて其の

是なるを求む。中に得る所無くして、徒に声価を仮借する者に非ず。

『日抄』について、長沢規矩也『支那学入門書略解』(『長沢規矩也著作集』第九巻所収、昭和六〇年、汲古書院)は、「その重要な部分は清儒が夙に引用してゐるから、今では本書をわざわざ観る程でもない」と述べている。なるほど『日抄』を入手することが難しかった時期においては、他書によって『日抄』を見ることも仕方がなかったであろう。しかし「読礼記」は、『礼記』全篇に注解を施した点に意義があり、長沢氏が言うようにその断片的な引用だけを見たのでは意味がないと言える。また梁啓超『中国近三百年学術史』(『梁啓超論清学史二種』所収、一九八五年、復旦大学出版社)は、『日抄』と顧炎武の『日知録』とは体裁は似ているが、『日抄』は手当たり次第に書かれた片言隻句の読書メモであって『日知録』のように再考されていないと言う。この評価も「読礼記」に関しては当てはまらない。なぜなら「読礼記」は、『日抄』の大半を占めるいわゆる箚記の部分とは性格を異にしており、どこまでも読者を意識した、それ自体が一つのまとまった『礼記』の注釈書であるからである。「読礼記」に対する評価は、その選述の意図等を明らかにした上で、改めて為されるべき点が多いように思われる。

五　黄震と南宋末の学風

以上、述べてきたような黄震の朱子に対する高い評価は、南宋末においては当然のものであったと言えるかもしれない。しかし黄震の出身地である慈渓県、および鄞県・奉化県・定海県・象山県・昌国県といった四明六県では、陸学もまた盛んであった。陸象山の弟子の楊簡などは、黄震と同じ慈渓県の出身であったが、黄震は決して陸学の

影響を受けなかった。それは黄宗羲が黄震の学統を「四明朱門学案」と名付け、黄震を四明において最も朱子学を尊んだ人物の一人とみなしたほどである。ところが南宋末の朱子学と言えば、本稿の冒頭で述べたように、専らその哲学的側面ばかりが取り挙げられ、その文献学的側面はあまり重視されなかった。黄震に拠れば、当時の学風は次のような気分であった。

> 漢・唐の老師宿儒　訓詁に泥み、多く義理に精ならず。近世は三尺の童子すら緒餘を承襲し、皆能く義理を言う。然して能く言うも行う能わず、反って漢・唐の諸儒の下に出づ（『日抄』巻八十二）。

もちろん黄震は朱子をいわゆる道学の大成者としても評価していた。しかし、それと同時に、朱子を訓詁学の復興者として再評価する必要があると考えたのである。なぜなら文献学的側面が疎かにされると、人々はともすれば経書を離れて、ひたすら空理空論に走り、その結果、朱子学が持つ哲学的側面は、例えば禅などと容易に結び付いてしまうからである。黄震はこの点を危ぶみ、訓詁学を提唱することによって、朱子学と禅とをはっきり分けようとしたのである。当時の学風を評して、黄震は次のようにも述べている。

> 夫子　六経を作り、後来者　詁訓に溺るるは、未だ害あらず。濂渓　道学を言い、後来者　借りて以て禅を談ずるは、則ち其の害深し（『日抄』巻三十八）。

こうした禅などの影響を受けた朱子学亜流を厳しく批判する発言は『日抄』中に多々見られ、これは後に清の顧炎武によって大いに引用されることになる。

しかし黄震の主張も空しく、朱子学はその本来の姿を離れ、人々の関心は新説を作り出すことに向かっていた。このような状況の中、黄震の興味は、逆に先儒の経学上の成果をまとめ上げることに在った。特に亡国の危機にさらされる中、宋学の成果を後世に残すという意図があったかもしれない。何れにせよ黄震は、南宋末を生きて、もはや経義について延々と分析を続ける時代ではなく、先儒の功績を総合していく時代であると考えたのではなかろうか。それもただ単に諸説を収集するのではなく、自己の見解に基づいてそれらを取捨選択して要約しよう、換言すれば、「博」から「約」への転換を図ろうとしたのである。以上の議論を総括すると、黄震の注解の根底には、禅などが朱子学に混入するのを避けるため、朱子学の二本柱の一本である訓詁の復興を提唱すること、そして当時の繁雑な注解の反省として、朱子学の成果を簡潔にまとめ上げること、この二点があると考えられるのである。

注

(1) 黄震およびその著作である『黄氏日抄』については、拙稿「『黄氏日抄』の巻数」(『中国研究集刊』昃号、一九九三年)参照。

(2) 『日抄』には、宋版以来伝統的に、句読点を初めとする様々な記号を付している。この( )もその一つで、注解等の中で、以下に解説が施されている語を強調するための記号である。したがって( )の中が、経文の語、すなわちメタ言語であることが多い。『函芬楼燼餘書録』は、「全書に句読ありて、経文には圏を用い、注には点を用う。注に書及び経の文字を引けば括弧を用う。緊要なる処は墨鉤或いは聯点を用う。読音は圏発を加う」と説明している。なお本稿はテキストとして『日抄』の元版を採用した。

(3) 「荊公新学略」中、王安石の学を重んじた人々を新学者と呼んでいる。新学とは、ふつう古文系テキストの『周礼』等を重んじた新の王莽のときの経学を指す。

本稿は日本学術振興会の平成五年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）―課題「清朝考証学と朱子学との相関的展開の研究」―による研究成果の一部である。

（大学院後期課程学生・日本学術振興会特別研究員）